

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会  
2012年5月12日  
文責：JUN

## バイオリン作りは木との話し合いから

その言葉は、たまたま見ていたテレビから流れてきました。

「計画書通り作るのではなく、木と話し合うことです」

番組は、バイオリン製作職人である菊田浩さんが、どのようにしてバイオリン製作の世界的な大会で優勝するまでになったかを描くドキュメンタリーでした。

菊田さんは、40歳頃まである放送局の職員でした。それまでバイオリンを弾いたことがなかったそうです。つまりバイオリン演奏に関してはまったくの素人だったのです。ところが、外国のある場所で偶然バイオリンを手に入れます。店に並べてあった安物です。その安物が、菊田さんをバイオリンの世界に引き込んだのです。

菊田さんは、放送局職員としての仕事をしながら、バイオリン製作を始めます。バイオリンの作り方を教えてくれる所に通い、とにかく作り始めたのですが、ようやくして出来上がったバイオリンを「設計図通り正確に作られているが、これはバイオリンではない」と言われてしまいます。

悩んだ菊田さんは、バイオリン製作に賭けることを決意し、放送局を辞めます。そして、イタリアに渡るのです。そうして、憧れのバイオリン職人R氏に師事するのです。R氏の門を叩いたとき、菊田さんはその時点でもっともよく製作できたと感じていたバイオリンを見せます。すると、日本で言われたのと同じように「正確にできているが、これはバイオリンではない」と言われてしまうのです。

それでも、R氏は菊田さんを弟子として受け入れます。こうして、菊田さんの本格的なバイオリン製作が始まるのです。冒頭のことばは、そのR氏から菊田さんにかけてられたものなのです。

ものをつくるということは、事前に立てた計画通りに行うものではないのです。プランはあくまでもプランです。実際に製作を始めたら、そのときの状況を察知し、その状況に対応する最良の方法を選択し実行しなければなりません。ましてや、バイオリンは繊細な音がいのちの楽器です。その繊細で優美な音を可能にするのは、バイオリンを形作っている「木」なのです。「木」の微妙な「すがた」が音を決めるのです。

もちろん、音とともに美しさも大切です。そのどちらも、実際に木に立ち向かい、木に手を入れた段階で、その木をどのようにバイオリンにしていくかという冒険と挑戦が始まるのです。それは、まさに、木との共同作業なのかもしれません。作り手は、その相棒で

ある木と心を通わせなければなりません。それを、R氏は「木と話し合う」と表現されたのでしょう。

テレビを見ていたわたしは、そのことばを耳にした瞬間、ぴくっと反応しました。それは、わたしの考えている授業づくりと全く共通することだったからです。

子どもの学びは、教師が事前に想定したプラン、つまり学習指導案ですが、その通りに実行すればよりよいものになるというわけではないのです。学ぶのは子どもです。教師が準備したことを子どもがどう受け止めるか、どういう考え方をするか、それは、授業になってみなければわからないことです。ですから、子どもの学びは、リアルタイムにおける子どもの状況に即して進めてこそ実のあるものになるのです。それは、製作を始めてから木と話し合うということと全く同じことです。

わたしは、ずっと、教師の専門性の最たるものは「関係性」と「即応性」だと言ってきました。学びを生み出すそのときに、関係性をとらえることができるか、即応性を発揮できるか、それによって、学びを生み出せるかどうか、学びの質を保証できるかどうかが決まるのです。それはまさに「木と話し合う」ことそのものだったのです。

教師は、何かの物をつくるというわけではありません。けれども、子どもを教え育てるという仕事は、ものを創作することと極めて似ています。決められたことを決められた手法で機械的に教えることで事足りるものではないからです。相手は生きている子どもであり、それも何人もいるのですから、その相手の状況に応じて、学びを生み出していく、それは、極めて創作的な営みです。何かを創り出すということは、自分の思いや考えだけでは全うできないのです。そこに不可欠なのは相手との「つながり」です。それが、「木の話し合う」という言葉にある、わたしはそう感じたのです。

「指導案通り行う授業は授業ではない。教師が、子どもや子どもの考えと、心の内で話し合うことができこそ、授業は授業になる」——心に刻みたい言葉です。

## 教師の厳しさということ

前々から書かねばならないと考えていたことの一つに、教師の厳しさということがあります。

「学び合う学び」を目指す教師は、一人ひとりの子どもが安心して学べる教室にするため心を砕きます。そのため、子どもの考えに寄り添い尊重すること、子どもの思いをくみ取することを何よりも大切にします。しかしそれは、子どもに迎合することではないはずで、子どもの好きなようにさせておくことではないはずで、子どもの考えを尊重することも、子どもの思いをくみ取ることも、すべて、子どもの内に豊かな学びを生み出すために必要なことだからそうするのです。しかし、そこに、学びに対する教師の厳しさが存在していないはずはないのです。

厳しさというと、子どもに厳しく対応することと短絡的に考え、強面での子どもへの対

応、子どもが委縮するような言葉づかい、事あるごとの叱責などを思い浮かべがちです。けれども、教師が発揮しなければならぬ厳しさとはそういうものではないのです。

学ぶということは、何らかの課題を自らに課して、それを探求することです。その過程では、どう考えてよいかわからないときもあるでしょうし、全くの考え違いをしてしまうこともあるでしょう。もっともっと奥深いものなのに、低いレベルのことで満足してしまうこともあるでしょう。仲間の考えを聴いたり、仲間とともに考え合ったりすれば、探求の道が見えてくるのに、それをしないで一人閉じこもってしまう子どももいるでしょう。いえ、それよりも前に、課題に立ち向かうより前に、匙を投げてしまう子どももいるかもしれませぬ。そういうさまざまな状況の子どもたち一人ひとりを、一人残らず「学び」の世界に誘う、そこで必要なのが教師の「厳しさ」なのです。

一人ひとりを「学び」の世界に誘う、それは子どもに対する「やさしさ」だとも言えます。それをわたしは「厳しさ」と表現しました。わたしが言う「やさしさ」と「厳しさ」にはどうかかわりがあるのでしょうか。

一般に「やさしさ」と「厳しさ」は相反することのように思われがちです。しかし決してそうではありません。「やさしさ」は、すべての子どものことに心を砕き、それぞれの子どもに学びが生まれるように対応することです。しかし、その「やさしさ」を本当に発揮するのはそれほど安易なことではないのです。そこには、教師によほどの覚悟と信念が必要です。つまり、「やさしさ」とわたしが言う「厳しさ」は表裏一体なのです。

#### 厳しさ1

学級で一つのことに取り組んでいるとき、または、個々に何らかの問題に取り組んでいるとき、子どもにさらなる可能性がないとは言えないのなら、軽々しく諦めないことです。子どもを叱責するわけではありません。スポーツ団体の指導者にありがちな大声を張り上げて鼓舞するということでもありません。子どもに寄り添い、子どもとともにその可能性に粘り強く挑むのです。学ぶということを中途半端にしないこの教師の姿勢は重要です。子どもが伸びるのであれば、決して諦めないという思いの強さ、それが厳しさです。

#### 厳しさ2

もちろん、子どもに強く迫ることも必要です。4月例会で、素敵な学び合いを見せてくれたある学級において、ある日、ややふざけた言動をとった子どもがいたそうです。その子どもに対して、授業の中ではそのことに全く触れなかった教師が、帰りの会が終わって帰ろうとするその子どもを呼び止め、向かい合うようにして、言い含めるように諭したというのです。感情的に叱るのはまずよい結果を生みません。それよりも、子どもがその行為を冷静に振り返ることができる状態を作り、きちんと話して聞かせるのがよいのです。わたしは、その教師は、叱ったのではなく諭したのだと考えています。毅然として教師の思いを伝える、これも、教師の厳しさです。

#### 厳しさ3

子どもの考えがある一定のレベルで落ち着き、そこからさらに考えて行こうとしなかつ

たとき、それで終わりにしないで、さらに考えなければいけないように仕向ける、それも学びに対する厳しさです。教師は、学びのレベルを上げることに躊躇しないことです。その食欲があるかないか、それは「学び合う学び」の実現にとって重要です。

ただ、教師にそのときの子どもの状況が読め、その先にどういう可能性があるのかが読めなければいけません。それが全く読めず、そこでかけた教師の要求が子どもの現状と乖離している場合、子どもが苦しむか、教師の指導から離れるか、そのどちらかになってしまふでしょう。レベルの高い学びに挑む厳しさは、子どもの状況が読める教師によって発揮できるものになるでしょう。

#### 厳しさ4

学級は、何人もの子どもがともに学ぶ場です。そこでは、個々の子どもの学ぶ権利が尊重されなければなりません。また、多人数であることを活用して、他者から学び合うことが大切にされなければなりません。ところが、場合によっては、個の学びの妨げになるような行為が生まれたり、仲間との学び合いを阻みかねない行動が発生したりすることがあります。中には、人としての存在を否定するような言動が生まれなとも限りません。そういう子どもの行為に対しては、許さないという断固たる姿勢を示さないとはいけません。その場合はまさに子どもへの厳しい対応になるでしょう。

もちろん、そういう行為が生まれるにはそれなりの背景があるでしょう。そういう背景に対する繊細な心遣いは必要です。その上で、どういう背景があったとしても、そういう行為そのものを許すことはできません。その場合、教師は、自分という人間性をかけて、子どもの真正面に立たなければなりません。それは生半可なことでは解決しない可能性があります。それでも、逃げることは許されません。そこには、子どもに対する厳しさ以上に、自分自身への厳しさが要求されます。

#### 厳しさ5

教師が発揮すべき厳しさを一口で言えば、それは「学びへの厳しさ」だと言えます。「学び」を実現するために必要なことならとにかく挑戦し、「学び」を阻害するものがあればなんとしてでも取り除く、その行動力なのです。

そのように考えると、その厳しさは、どうやら、子どもに厳しく当たるといより、教師が自分自身に課す厳しさだということに気がつきます。そうなのです。教師の「厳しさ」とは、実践者として、授業者として生きる自分自身に対するものなのです。子どもは、そういう教師の下でだけ、様々な困難に立ち向かい、どこまでも学び切ろうとする意欲と行動を鮮やかに見せてくれるのです。

考えてみれば、教師の仕事は複雑でナイーブで多くの困難さを伴うものです。けれども、日々子どもへのかかわりの魅力は他に代えようのないほどの魅力に富んでいます。その魅力がわたしたち教師の心をとらえて離さないのです。

多くの困難が存在する仕事ではあるけれど、子どもの前ではそういう様子はみじんも見せない、そして、なんだかいつも自分たちのことを見ていてくれる、自分たちの可能性を信じて寄り添ってくれる、いっしょに喜び泣いてくれる、そういう教師を子どもたちは信

頼みます。子どもたちがそう感じることができるようになるように接する、それは言葉ほど簡単なことではありません。かなり自分に厳しくないといけないことだと言えます。

#### 厳しさ6

教師は孤独です。自分のありようで学級も子どもも、そして子どもの学びも変わるわけですから、そう思えば思うほど、孤独になります。しかし、その孤独に耐えなければなりません。孤独さに没入し、自らに打ち勝たなければなりません。

しかしそれは、苦痛に顔をゆがめなければいけないものではありません。子どもと向き合う仕事にはたとえようのない楽しみがあり、しかも、自らの努力と工夫によりいかようにも変化しうるものだからです。教師の孤独はそれを自らの楽しみにしていける孤独です。そうできるかどうか、それもある意味、教師の厳しさだと言えます。

#### 厳しさ7

豊かな実践を繰り返し広げている教師は、自らの事実を振り返ることができる人です。思うような授業ができなかったとき、その事実きちんと正対できる人です。そうなった自らの事実から逃げない人です。教師の専門性は、そうした一つひとつの事実をていねいに振り返ることではか身につかないからです。自分の貧しさに向き合うということはつらいものです。けれども、そのつらさに耐えることで教師としての喜びも生まれます。これこそ教師がもっとも自らに課さなければいけない厳しさだと言えます。

#### 厳しさ8

自らの実践を振り返るとき、もう一つ大切なことがあります。それは、他者に自分のありようを開くことができるということです。教師は孤独だと述べましたが、それは、他者との関係を断って、自分の世界に閉じこもってしまうことではありません。その逆です。他者とのかかわりに積極的でないと、豊かな実践は生まれないのです。もちろんそのかかわりは、いわゆる人づきあいをよくするといった類のものではありません。

人は自分のことほど見えないものはありません。自らを振り返ろうとしたら、信頼できる他者からおおいに指摘を受けるべきです。また、一人が成しうるものは決して大きくないということを知っている人は、他者とのかかわりを求めます。自分だけしか見ていない教師は、どれだけ実践しても、その実践は本物になりません。他者に開くことができる、これも教師の大切な厳しさです。

教師の「厳しさ」とは、どこまでも「学び」を深めようとする厳しさです。子どもは、その厳しさを心に宿す教師の下で、その教師の思いに応え、自らの可能性を引き出しているのです。

ただ、最後にどうしても述べておきたいのは、厳しさを発揮するということは、つらさばかりではないということです。子どもと向き合う教師の仕事には、限りない希望と可能性があるからです。わたしたち教師は、プレッシャーを楽しみにし、自らの可能性に挑めることを喜びにしていきたいものです。その向うに子どもの笑顔があふれているのですから。